

O2-022

新型コロナウイルス状況下における乳幼児の成長発達

～健やかな成長発達への支援を目指して～

岩本 美由紀、加瀬 由香里

明治国際医療大学

【目的】

本研究は、COVID-19 流行下、保育施設の乳幼児の成長発達に及ぼす要因と生活環境を明らかにすることを目的とした。

【方法】

半構成的面接を用いた帰納的アプローチによる質的記述的研究法（M-GTA）を用いて、京都市内の 2 施設の子ども園に勤務する保育士 6 名を研究対象とした。対象は、女性 6 名、平均経験年数 13 ± 17 歳であった。インタビューは、インタビューガイドを基に平均時間 30 分で実施した。インタビュー対象者の許可を得て録音をした後、逐語録を作成した。逐語録データから、M-GTA を用いて概念化して質的帰納的に分析し、サブカテゴリー化・カテゴリー化を行った。

【倫理的配慮】

本研究は、明治国際医療大学ヒト研究倫理審査委員会の承認を得て行った。（2021 - 012）

【結果】

分析の結果、21 の概念が抽出され、8 サブカテゴリーから成る 4 カテゴリー〔保育士のマスク着用による影響〕〔食事環境の変化による影響〕〔長期化する自粛生活による影響〕〔感染防止対策による影響〕が抽出された。〔保育士のマスク着用による影響〕では、「保育士の表情が読み取りにくい」ことによる感情の伝わりにくさや顔認識の難しさ、「コミュニケーションへの影響」として言語発達の遅れ、物理的距離の解り難さなど、発達への影響がみられた。〔食事環境の変化による影響〕では、「人との距離感を保った環境」や「黙食の習慣化」により、食を通したコミュニケーションや楽しみの減少がみられた。さらに、乳幼児の順応による将来への不安を感じていた。〔自粛生活による影響〕では、家族以外の「他者との交流の減少」による子ども同士の関わり方の不器用さや精神発達の遅れがみられた。また、「外遊びの減少」による、動画視聴増加や運動の低下が示唆された。「外出自粛による母親の心理面」については、育児ストレスや子どもの成長の実感、育児不安など母親による差異がみられた。〔感染防止対策による影響〕では、「家庭による感染防止策」の習慣化や認識については差異がある事が明らかになった。

【考察】

乳幼児は、コミュニケーション機能の発達過程にある為、保育士のマスク着用により、表情や口元から読み取れる情報の減少による影響を受けやすいと考える。また、食への関心を高め、満足感を得るなど、食の基盤となる時期である為、食環境の変化による今後の影響が、危惧される。

O2-023

感染症サーベイランスからみたムンプス・DPT ワクチンの追加接種の有効性の検討（ムンプスと DPT 追加接種の定期化にむけて）

落合 仁¹、矢野 拓弥²、菅 秀³、谷口 清州³¹ 落合小児科医院、² 三重県保健環境研究所、³ 国立病院機構三重病院

ムンプスウイルスは飛沫感染でヒトからヒトに感染する。ムンプスウイルスに感受性をもつのはヒトだけである。ムンプスは比較的生命予後は良いが脳炎、難聴などの予後の悪い合併症がある。ムンプスにはワクチンがあるが、わが国では任意接種で世界的には多くの国で麻疹や風しんと同様に定期接種として行われている。先進諸国のほとんどは麻疹・風しん・おたふくかぜ三種混合（MMR）ワクチンの 2 回接種を行っており、おたふくかぜの流行はほとんどない。結果としてムンプス難聴になる人はほとんどいない。百日咳はわが国では 1948 年に百日咳ワクチンが導入される以前は乳幼児を中心に年間 10 万例以上が発症し、うち 10% が死亡していたがワクチンの普及とともに患者は激減したが 2007 年以降年々増加している。結果、ワクチン未接種の乳幼児が感染すると重篤化しやすく罹患した半数は呼吸管理が必要となる。三重県 K 市ではムンプスワクチンを 2008 年 4 月 1 日、DPT ワクチンを 2020 年 4 月 1 日より接種料金の助成を開始し、2020 年ムンプスワクチン 1 歳時に 94.4%、DPT ワクチン就学前 66.7% の接種率を確認している。接種率の向上と共に感染症サーベイランスで地域からの疾患登録はムンプスは 2009 年から 10 年間、百日咳は 2020 年から 3 年間登録がみられない。このことは助成によるワクチン接種により集団免疫率を高い値に維持することが重要と考えられた。併せて接種時期に関して考察してみたい。